慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	能率心理学と人間技術学
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.10 (1934. 10) ,p.1473(1)- 1527(55)
JaLC DOI	10.14991/001.19341001-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19341001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田評論

十月號

日吉建設資金募集趣旨書竝寄附申込者氏名及金額

就職に就て……平田篤次郎

ハーヴァード・チームの來朝に就て……恒松安夫

維納通信……武村忠雄

故伊藤教授と中國人留學生……藤田四郎

滿鮮だより……林毅陸

滿鮮に於ける林先生……井寺峰吉

滿鮮印象……滿洲產業建設學徒研究團員

滿鮮の旅……望月支那研究基金旅行隊

西日本一周ドライブ記……林周二

紀行

大學豫科入學者及第一學年在學者に關する諸統計表

□塾報　□雜報　□各地三田會だより

□圖書館記事　□動靜　□維持會報告

□故伊藤教授遺兒教育資金募集趣意書竝應募者氏名

□日吉建設資金拂込者氏名

□北里博士記念醫學圖書館建設資金募集趣意書

□編輯餘瀝

定價　金參拾錢

一年分　金參圓四拾四錢　振替貯金東京一八二〇四番

發行所　東京・芝・三田　慶應義塾

三田學會雜誌　第二十八卷　第十號

能率心理學と人間技術學

藤林敬三

內容

第一部　能率心理學の問題とその意義。

第二部　人間技術學の目的と社會心理學的問題。

第一部　能率心理學の問題とその意義

一

經濟心理學は應用心理學であり、即ち實踐的應用心理學である。それが經濟心理學と稱せられる所以は、吾々の日常經濟生活に對する心理學の實踐的應用を目的とするからである。しかしこの應用心理學部門は現に種々なる名

稱を以つて呼ばれてゐる。即ち主として英國ではそれは產業心理學と稱せられ、(註二)ドイツではまた單に精神技術學 Psychotechnik とも稱せられる。蓋し自然科學の實踐的方面が技術學と稱せられるのに對して、心理學の實踐的應用部門を稱して精神技術學といふのは適當である。然かも經濟心理學と同義にこの名稱が用ひられるに至つた所以の一半は、從來技術と稱せられたものが吾々の經濟生活と密接に關聯して居り、經濟生活の發展のために確かに重要な役割を演じて來てゐるのに對して、また經濟心理學が同樣に經濟生活の發展に對して占める意義が益〻重要であると考へられるからである。そしてこの意味に於いて精神技術學といふ名稱は捨て難い。(註三)しかしこの名稱は最初には W. Stern に依つて應用心理學の內にあつて、精神認定學 Psychognostik に對列して用ひられ、精神認定學が專ら事實の心理學的認定を問題とするのに對して、それは人物處理 Menschenbehandlung の手段方法に關するものとせられた。(註三)然るにミュンスターベルクは精神技術學を以つて一切の實踐的應用心理學部門を總稱するものとした。勿論、應用心理學は問題の實踐的決解に際して先づ事實の心理學的認定を欠き得ないのであるが、然かもその科學的任務は理論の問題にあるのではなく、常に問題解決のための手段と方法の確立にあるが故に、精神技術學を彼の如く解することは必ずしも不當ではない。然かも彼以後精神技術學の意味は三度變じて、今日では未だ確定的だとは云ひ得ないが、大體ドイツに於いては經濟生活乃至產業生活に對する應用心理學は即ち精神技術學なりと見られるやうである。(註四)そして現に精神技術學が經濟心理學と同義であると見られる所以は、一部分は前述の如くであるが、それはまた他方に於いては、經濟心理學がその創說者であるミュンスターベルク以後長足の發展をなし、今日では教育心理學、犯罪心理學に比較して應用心理學中第一の地位を占めるに至つてゐるといふ事實を反映するものであらう。

かくて經濟心理學は今日產業心理學とも稱せられ、また精神技術學とも稱せられる。私自身は從來種々なる機會に精神技術學の名稱を寧ろ多く採用して來たのであるが、本來一般の應用心理學者とは經濟心理學の意義に關して見る所を異にしてゐるのであつて、現存の名稱は何れを採用してもそれに依つて私の見解を他から區別することは困難である。しかし精神技術學といふ名稱は比較的私の見解を表明するのに適當だと考へてゐるのであるが、今は唯だ便宜上經濟心理學の名稱を採用して置かう。(註五)尙ほ以上の諸名稱の外に經營心理學の名稱が存してゐるが、(註六)私の見る所では、從來以上の諸名稱に依つて代表せられて來た應用心理學は、寧ろ經營心理學と稱せられることが適當であると思はれる。更らに後に論ずるが如く、それは正に能率心理學と呼ばるべきものである。

註一　吾國では產業心理學といふ名稱が次ぎの著譯書に依つて採用せられてゐることは、既に讀者の知らるゝ所であらう。時口理一譯　現代產業心理學講話　大正八年。小川忠藏著　產業心理學　昭和五年。高垣、金子共著　產業心理學　昭和七年。

註二　拙著　資本主義產業と技術の問題、第三章　參考。(世界經濟問題講座　第五回配本)

註三　F. Giese; Theorie der Psychotechnik, 1925, S. 1. W. Stern; Die Differentielle Psychologie, 3. Auf., 1921, S. 7-10.

註四　尙ほ精神技術學の意味に關しては多少ミュンスターベルク流の考へが存して居り、從つて Industrielle (und kaufmännische) Psychotechnik と稱せられたり、また Wirtschaftspsychotechnik と稱せられたりしてゐる。更らにリップマンは寧ろ

經濟心理學と稱してゐたのであるが、別に既にスキスに於いて作られた Technopsychologie なる名稱を暗示してゐる。（J. Riedel, hersg. von; Arbeitskunde, 1925, S. 55.）そしてまたスキスからは同樣の名稱を有する著作さへ存してゐる。（L. Walther; La Technopsychologie du Travail industriel, 1926.）しかしリップマン自身の Psychotechnik に關する考へは多少動搖して最後には凡そ次ぎの如きものとせられてゐる。即ち Psychotechnik とは心理學的方法を以つて實際上重要な效果を擧げんとする一切の技術的規準の總體である。そして實踐的應用心理學が Psychotechnik の技術學であつて、前者は後者に對列し、またそれに先行する科學である。（O. Lipmann; Definitionen, in: Zeitschr. f. angew. Psychol. Bd. 41, Heft 1/3, 1932, S. 2.）かくて Psychotechnik はもはや精神技術學ではなく、單に精神技術に過ぎないものとなるが、これに對しては吾々は別に Psychotechnologie の名稱を採用してもいゝ譯けである。勿論、單に言葉の上の問題ではなく、實踐的な方法とそれを基礎づける科學とを區別することも可能であると考へられるかも知れぬが、この區別は重要でない許りではなく、これに依つて實踐的應用心理學は他の科學と同樣に、恐らくはリップマンに依つて科學の中立性を保證せられるためであらう。しかしこれが、吾々には寧ろ重要な問題である。（Vgl. Festschrift William Stern, Beih. z. Zeitschr. f. angew. Psychol., 59, 1931, S. 177 ff.）

註五　吾國の一般讀者には精神技術學といふよりも經濟心理學と云つた方が幾分理解され易いであらう。また經濟心理學なる講座さへ今日では吾國の二三の大學、專門學校に於いて存するやうでもある。尙ほ本文中には指摘して置かなかつたが、別に勞働科學なる名稱中に經濟心理學の重要なる部分が含まれてゐることがある。この點に就いては次ぎの拙稿を參考とせられ度い。　拙稿、勞働科學に就いて、（三田學會雜誌　第二十七卷　第五號）

註六　E. Lysinski: Psychologie des Betriebes, 1923.

總ての應用諸科學と同樣に、先づ經濟心理學も亦それが、如何なる實踐的目的を持ち、何を問題とするか、且つまた如何にしてその問題を解決せんとするかが明かにせられねばならぬ。換言すれば、吾々は經濟心理學の本質が何であるかを顧慮する必要がある。私は先づ經濟心理學が從來問題として來たものを檢討することに依つて、些かこの第二の問題に觸れやうと思ふ。そして經濟心理學が如何なる方法に依つて問題を解決せんとするかは後の問題に讓り度い。

經濟心理學は經濟生活に對する心理學の實踐的應用をことゝすると一般に考へられてゐるが、それは凡そ次ぎの如くである。即ち吾々の經濟生活中人間の心理的過程の關與する處では、その心理的過程の基本的認識が常に精神技術學的應用を可能する。そしてこの心理學的應用に依つて期待せられるところは、「同一の經濟的効果を得るにより僅小なる力を以つてし、或は同一の力を以つてより大なる効果を得る」にある。（註七）換言すれば、心理的事實の關する限り、經濟心理學は經濟問題を合理的に、世間に所謂經濟主義の原則 Das wirtschaftliche Prinzip に從つて實踐的に解決することを目的とする。そしてその解決せらるべき個々の問題を、ミュンスターベルグは現實社會の要求に從つて選ぶべきものとし、次ぎの三つの課題を重要なりと考へた。（一）一定の作業を行ふために最も適當し、最も有能なる人物を選定すること、（二）人の作業を質的に改善し、量的に增進し、作業の障害を除去すること、（三）人に對するある心理的影響が最も重要な經濟事象を問題とすること、これであつて、この三課題中に彼は今日の經濟心理學の問題とする所を殆んど總て包含せしめてゐると云つていゝ。即ち彼は第二課題中に職業的選拔と職業指

導とを問題とし、第二の課題中には技術的教育或は訓練と作業の合理化の問題を擧げ、更らに第三課題中には各種の廣告手段、店頭裝飾の心理的効果、及び販賣員の顧客に對する心理的影響等の諸問題さへも論じてゐる。(註八) そしてこれ等の問題は現に職業心理學、作業教育(職業的、或は技術的教育、訓練)、作業心理學 Arbeitspsychologie の三分科の内に採用され、それ等は全體として經營勞働の合理化に關するものとして經濟心理學の中樞をなしてゐる。またミュンターベルグの最後の課題は廣告心理學、寧ろ更らに廣く販賣心理學として、これまた經濟心理學中の一重要分科を構成してゐる。かくの如くにして今日の經濟心理學はミュンスターベルクの指摘した問題以上に出でるものではなく、何人も彼を以つて經濟心理學の創說者であると見做してゐる。勿論彼の經濟心理學、或は經濟的精神技術學 Wirtschaftliche Psychotechnik od. Wirtschaftspsychotechnik 中に取扱はれた個々の問題に比較すると、彼以後の短期間の經濟心理學の發展に依つて開拓せられた範圍は甚だ廣大であつて、且つ彼の例示せる實踐的、精神技術學的方法の多くのものは今では單に古典としての意義を有するに過ぎない。

ミュンスターベルクは以上の諸問題を以つて、工業並に商業上心理學の實踐的應用を俟つて初めてよく解決し得られる、經濟上近來益〻重要視せられるに至つた問題であると考へた。(註九) 今これ等を產業經營の活動に比較して觀れば、第一には先づ作業の遂行に必要な人員の採用問題であり、新たに採用せられたものに對する作業上の教育と訓練の問題であり、更らに實際作業に關する合理化の問題であり、最後に製品販賣の擴大の問題である。換言すれば、彼の經濟心理學は經營活動の能率增進問題の解決を目的とするものであると云つていゝ。——かくて前述の如く、この意味で先づ經濟心理學は經營心理學、或は能率心理學と稱せられる方が、寧ろ適當である。——更らに彼の經濟心理學の著作はアメリカでは「心理學と產業能率」と稱せられてゐるのであるが、事實また彼をして經濟心理學を創說するに至らしめた重要な契機の一つはテイラーの科學的管理法であつたのである。そこで吾々は、一般的に云つて、經濟心理學がアメリカ流に云へば產業能率增進問題、今日の言葉で云へば產業合理化問題にその固有の問題を見出すものであると云つていゝ。

註七　H. Münsterberg; Gründzüge der Psychotechnik, 1914, S. 360.

註八　Derselbe; Psychologie und Wirtschaftsleben, 1912.; Psychology and Industrial Efficiency, 1913.

註九　彼はまた農業勞働の能率化といふ問題も經濟心理學の問題に取り上げてゐるが、(s. Gründzüge, S. 362 ff.) その後この方面に關する精神技術學の發達は他の商工業上の問題に關するものに比較すれば、勿論農業經營の性質上、左程顯著ではない。序でに此の方面に興味を有せられる讀者のために二三の文獻を示して置かう。
G. Stieger; Der Mensch in der Landwirtschaft. F. Steding; Psychotechnik in der Landwirtschaft, 1926. Bücherei für Landarbeitslehre, hersg. von W. Seedorf, (1925—)

三

經濟心理學の問題は、右に論述した如くであつて、既にミュンスターベルクに依つて判然と確定せられてゐた。只だ現在では個々の具體的な問題の分野が甚だ廣く開拓せられ、問題解決の心理學的方法がまたそれと同時に著しく科學的に發展してゐると云ふに過ぎぬ。そこでこの經濟心理學の問題を通じて、その目的を吟味して見るのが私

の第一の課題であるが、これに先つて經濟心理學の體系を簡單に知つて置くことが更らに便宜である。蓋し一科學の持つ體系はその科學の本質と重要な關係にあるからである。

ミュンスターベルクは經濟心理學の問題を三分し、これを簡單に最良の人物、最良の仕事、最良の効果としてゐるが、それは嚴密な意味では體系としては未だ批判せられ得る部分を持つてゐる。例へば作業教育の問題の如きは、或は作業心理の問題から分離する方が、適當であるとも考へられるであらう。しかし元來問題の實踐的解決を生命とする經濟心理學には、特に科學的體系を必要としないとも考へられる。また現實の經濟社會は常に變轉し、新しい精神技術學的問題も從つて生じて來るであらう。恐らくかくの如き見解が、意識的にまた無意識的に、主として英米の應用心理學者をして特に産業心理學の體系を考へしめない所以であらう。彼等は寧ろ問題そのものを重視してゐると云つていゝ。しかも彼等が産業心理學を一般的に論ずる場合には、ミュンスターベルクの例に大體從つてゐると云つて宜からう。（但し廣告心理學は産業心理學からは區分せられゐる場合もあるが）。（註一〇）

ミュンスターベルクの經濟心理學の持つ三つの問題群は、經營活動の三つの方面に相應するものであると見做し得ることは既に述べた所である。從つてこの經營の立場から精神技術學的問題を系統化することは勿論可能であつて、この方面から精神技術學を體系化そうと試みたものに E. Lysinski がある。そして彼はもはやこれを經濟心理學とは稱せず、經營心理學と稱してゐるのは當然である。彼は經營活動に關する應用心理學的問題を生産と販賣、換言すれば勞働と廣告の二方面に分割し、勞働心理學と廣告心理學の二分科を以つて經營心理學を構成した。そして彼の云ふ勞働心理學はミュンスターベルクの第一と第二の問題を含むものである。（註一一）私は既に讀者に對して、從來の經濟心理學は寧ろ經營心理學と稱せられる方が適當であることを述べて置いたが、リジンスキーの見る所は此の點では確かに優れてゐる。蓋し經濟心理學がその實踐に於いて解決せんとする問題は殆んど總て、經營の手に於いてせられる經營能率增進のためのものであるからである。勿論經營の種類を異にするに從つて精神技術學の問題は異なるし、また例へば工業經營に於いては廣告心理學が時には左程重要でないに拘らず、商業經營に於いては廣告心理學乃至は販賣心理學の方面がより重要視せられるといふことはある。更らにそれよりも此處に一つの難點は職業指導の問題である。經營心理學に於いてはこの問題は確かにその內の何處にもその地位を占め得ない。事實の問題としては今日尙ほ經營自體も亦、云ふまでもなく職業指導の問題に重要な關係を持つてゐる。しかしそれは決して商工業上の何れの經營の手に於いても行はれるのではなく、公共團體の社會政策的施設の手に於いて行はれてゐる。かくて職業指導に關する精神技術學的問題を放棄するにあらざれば、經濟心理學は經營心理學となることが困難であるとしても、私が特に讀者の注意を喚起して置き度いのは、職業指導の問題と雖も結局それは經營能率の增進問題に過ぎないといふ點である。そしてこの點に就いては再び後に論ずることゝしやう。

リジンスキーは經營の立場から生産と販賣とを區別し、精神技術學の諸問題を勞働心理學と廣告心理學とに分つたのであるが、形態の上ではこれと同じ區分が他の應用心理學者に依つても行はれてゐる。但し彼等の見解はもはや經營活動の區分に應ずるのではなくして、國民經濟上の事實に對應しやうとするものである。

リップマンは嘗て、「經濟學は人間を分つて生産者と消費者、或は勞働者と購買者の二群とする。これに從つて經濟心理學はまた一方では勞働者の心理を、他方では購買者の心理を問題としなければならぬ」。と述べたことがあるが、（註一二）これと同樣の見解はその後 W. Weber の採用する所となつてゐる。即ち彼に從へば、經濟生活は生活手段の調達と利用、財の生産と消費に二分せられる。經濟心理學は實踐的目的を以つて經濟生活に於いて應用せられる心理學である。從つてそれは生産のための心理學と消費のための、即ち販賣のための心理學に分たれる。（註一三）そして前者に於いては職業心理と作業心理の問題が取り扱はれるのであつて、正に形態の上ではリジンスキーの勞働並に廣告心理學の二分類に全く等しい。しかし內容の上では經營心理學に欠けてゐる職業指導の問題は、この意味の經濟心理學中の問題たり得ることは勿論である。

今暫らく職業指導の問題を別にして觀れば、何故この同じ精神技術學上の諸問題が一方では經營の立場から、他方では國民經濟上の立場から體系化せられるか。後の私の論述のために、此處で簡單にこの問題の要點を指摘して置くことが必要である。精神技術學を經營心理學とするものは先づ問題ないとして、多くの應用心理學者は恐らくは國民經濟上の立場を援護するであらう。その理由を簡單に示せば、經濟心理學は應用科學として科學の一部門である以上、社會のため、或は人類全體のために有用なるものであつて、決して社會の單に一部分のための、即ち資本家のための科學でもなければ、また勞働者の利益のための科學でゝもあり得ない。寧ろ科學としてはそれは中立的性質を持つ、といふにある。經營心理學が企業利潤のための科學であると解せられることは甚だ容易である。嘗つてテイラーの科學的管理法がこの點で批判せられたのと同樣である。然し應用心理學者達は、恐らく經濟心理學が利潤のための科學であると評せられることを慾しない。單にそれ許りではない。經濟心理學者は時に Taylorismus の受けた批判から免れんがために、經濟心理學は勞働者の酷使にその問題を見出すべきものではなく、勞働力の合理的な利用を目的とせねばならぬと云ふ。（註一四）そして經濟心理學は經濟生活に對する應用心理學として、吾々の經濟生活の發達のために有用であることを主張せんがためには、國民經濟上の事實に對應して經濟心理學を體系づけることが便宜である。しかもまた必ずしもかくする必要はない。蓋し私經濟的利益は國民經濟的利益と相反するものではなくして、兩者は相一致するものであるとも考へられるからである。そして總ての應用心理學者は正にこの見解を支持するものであると云つていゝ。しかし經濟心理學がその實踐を通じて私經濟的利益に奉仕するものであることは否定し得ない所であつて、嘗つて經濟心理學の客觀性と中立性とを主張した W. Moede は、（註一五）精神技術學の私經濟的態度と國民經濟的態度とを同時に認め、彼の云ふ產業的精神技術學を二とし、一つは經營心理學、他は經濟心理學と稱せられ得るものとした。そして前者は作業心理學、管理心理學、販賣心理學をその內容として私經濟的要求に應ずるものであり、後者は國民經濟的要求に從ふものとする。しかし彼の說く產業的精神技術學は經營の私經濟的要求に應ずるものであつて、その體系はまた從來の經濟心理學のそれと異なるものではなく、適性檢査、職業的敎育、作業合理化を問題とするものであると思はれる。（註一六）

吾々は最後に F. Giese の見解を見て置かう。彼は經濟心理學を主觀的精神技術學 Subjektspsychotechnik と客

觀的精神技術學 Objektspsychotechnik に二分する。前者は經營要素としての人間をその經濟的諸條件に適應せしめることを主題とし、後者は、これに反して、諸物件、即ち原料、機械及び道具とその環境とを人間の心理的性質に適應せしめることを主題とする。そして前者の問題は職業心理、作業教育、人物處理に關するものであり、後者は作業心理、更らに彼が作業心理から區別する作業場の合理化、とエネルギー經濟（この二者は共に作業環境に關する精神技術學的研究と實踐である）、及び廣告心理を問題とする。（註一七）ギーゼのかくの如き見解は嘗つてまたリップマンの明白に述べた所である。即ち彼は經濟心理學の諸問題を三つに分つて、（一）製品と經營の諸施設とを消費者の一般的性質とその特性とに適應せしめること、（二）生產者（即ち作業者）の一般的性質に經營の諸施設を適應せしめること、（三）生產の特種の要求に對して生產者を適應せしめること、としてゐる。（註一八）彼が、ギーゼの如く主觀的方面と客觀的方面を對立せしめながらこれを二分しなかつた理由は、先きに述べた如く、彼は經濟心理學を先づ生產者心理學と消費者心理學とに分つてゐるからであり、そして右の第一の問題は消費者心理學の問題であり、後の二つの問題は生產者心理學に屬するものである。ギーゼとリップマンと何れを執るべきかは此處では重要でない。只だ主觀的精神技術學と客觀的精神技術學の區別は吾々に多少の興味を與へるものである。

凡そ心理的諸現象が客觀的諸條件に對する反應として理解せられ得るものであるとすれば、經濟心理學の多くの問題が客觀的諸條件に關する心理學的研究に依つてその解決に近づかれ得るものであることは明かである。そして此處に云ふ客觀的諸條件とは個人の生活を還る一切の客觀的事實を包含せしめねばならぬのであつて、それは單に個人の生產的活動の自然的、物理的環境のみならず、個人の生活の總ての社會的還境をも含むことは勿論である。かくて特にその社會的環境の改善を必要とする場合には、當然經濟心理學は社會政策、一切の經濟政策の問題と關聯するに至ることは當然であつて、此處に經濟心理學的實踐に對する限界が存在する。そしてまた反對に總ての經濟政策は此の點に於いては確かに經濟心理學的研究を無視し得ないのである。しかも經濟心理學の實踐は此處で多くの場合には實際政策の動向に依つて抑制せられるであらうけれども、決して經濟心理學的研究は現實社會の諸政策に妥協し、從屬するものではなく、かくの如き場合には却つて現實政策の嚴格なる批判者としての地位に立たなければならない。

それは兎も角、主觀的方面と客觀的方面とを對立せしめることは、心理的現象の本來の性質に顧みて、實踐的應用心理學に取つては一つの重要な觀點である。しかし經濟心理學の實踐的な問題は、前述の如き限界を除いても、總てしかく簡單に或は客觀的精神技術學の問題とし、或は主觀的精神技術學の問題として處置し得られるものではない。蓋し如何なる場合にも主觀的方面と客觀的方面とが密接に關聯するからである。かくの如き難點があるにしても、兎も角ギーゼの經濟心理學的體系は問題の心理學的現象の本質に關聯するものであつて、この點では科學的體系としては確かに他のものに比較して多少吾々の關心を惹くに足るもののやうに思はれる。しかしギーゼの云ふ客觀的精神技術は、前述の如く、主として物的諸條件を重視するものであつて、社會的諸條件は未だ全般に渡つて充分考慮せられては居らぬ。（只だ彼は人物處理の問題に於いて社會心理學的な考慮を行つてゐるに過ぎない。（註一九）

從つて彼の經濟心理學體系は實踐的な問題が何處にあるかを明確に示し得るものであるが、單に從來の、他の經濟心理學體系を僅かに編制替へしたに過ぎないやうなものであつて、特に彼の體系から經濟心理學の異つた意義を窺ふことも殆んど不可能である。彼は偶〻「經濟生活に於いては客觀的精神技術學が、主觀的精神技術學よりも、本質的により大なる役割を演じなければならぬことは明かである。」（註二〇）と述べてゐるけれども、それは恐らくミュンスターベルクの見解に同じで、從來の技術の發達が幸ひにして人間の精神物理學的性質を無視するものでなつたし、また應用心理學はこの技術的施設を人間の精神物理學的性質に適應せしめるための研究を採用しなければならぬ（註二一）といふ以上のものを意味しはしないであらう。勿論これは經濟心理學の一つの重要な問題であるが。しかし全體として、彼の經濟心理學が持つ諸問題は他のものに比して異なるものではなく、終局それはまた經營の能率增進問題に過ぎない。

かくの如く經濟心理學の問題は一見種々なる體系の下に處理されてゐる。しかし何れに於いても問題の性質は同一であつて、それが經營の私經濟的要求を第一義的に充たすものである點に於いては決して異なるものではない。否な一見多少の相異を認められる經濟心理學諸體系も、寧ろ實質上何等異なるものでないと云つた方が、適當であらう。凡そ應用科學の體系は理論的科學とは異なり、實踐的な應用の方面を生命とするものである以上、その科學全體は各應用科學に固有な實踐的目的に依つて規定せられ、方向づけられねばならないものであり、その科學的體系も亦その固有の實踐的目的と無關係では有り得ない。かくて經濟心理學が如何なる實踐的目的を有するかを明確にして後に初めて、それに基づいてその科學體系が確立されなければならない。ミュンスターベルクは商工業上の實際的要求である經營の能率增進問題を、心理學の視角からその解決に近づき得るものとして、新興經濟心理學の實踐的目的としてこれを採用し、その問題を上述の如く三群に分つたのであるが、吾々の見解から觀ればそれは大體經營活動の系統に相應するものであつて、――勿論彼自身は商業、工業、更らに農業といふが如く、經濟社會の業態別に從つて問題を分たうとしたものであるけれども――また彼以後の經濟心理學の諸體系が實質上、彼のそれに類似してゐることは正に當然の歸結であると云ふべきであらう。從つて今日經濟心理學者がその實踐的目的を私經濟的なものではなく、國民經濟上のものに變色しやうと慾してもそれは不可能である。蓋し事實彼等の經濟心理學上の實踐は經營の私經濟的要求を離れては存在しないし、また存在し得ないからである。この意味で今日の經濟心理學は徒らに國民經濟上の目的を借りて來るよりも、その實踐的な諸問題が事實經營の能率增進に如何に關聯するかを觀、またその理論的諸研究が實踐的問題と如何に關係すべきものであるかを明かにして、經濟心理學體系を建設すべきものである。そしてこの點ではミュンスターベルクは確かに見るべきものを殘してゐたと云はねばならぬ。ギーゼが主觀的精神技術學と客觀的精神技術學とを對立せしめる試みは、またこの點で批判せられねばならない。即ち經濟心理學が先づその固有の實踐的目的に依つて體系づけられ、その體系の部分的な方面では彼の見解は或は重要な見地となり得るであらう。かくてある意味では、彼よりもリップマンの考へた經濟心理學體系の方が優つてゐる。

註二〇　B. Muscio; Lectures on Industrial Psychology, 2nd. ed., 1920.

J. Drever; The Psychology of Industry, 1921.
F. Watts; An Introducton to the Psychological Problems of Industry, 1921.
H. D. Harrison; Industrial Psychology and the Production of Wealth, 1925.
C. S. Myers; Industrial Psychology in Great Britain, 1st ed., 1925, 2nd ed., 1933.
H. Wallon; Principes de Psychologie appliquée, 1927.
H. E. Burtt; Psychology and Industrial Efficiency, 1929.
H. J. Welch and G. H. Miles; Industrial Psychology in Practice, 1932.

註一一　E. Lysinski; Psychologie des Betriebes, 1923.
註一二　O. Lipmann; Wirtschaftspsychologie, S. 4.
註一三　W. Weber; Die praktische Psychologie im Wirtschaftsleben, 1927, S. 12-16.
註一四　Vgl. Lipmann; Wirtschaftspsychologie, S. 7-8.
註一五　Industrielle Psychotechnik, 8. Jahrg. H. 9, 1931, S. 281-282.
註一六　W. Moede; Lehrbuch der Psychotechnik I. Bd., 1930, S. 2-3.
註一七　F. Giese; Methoden der Wirtschafspsychologie, 1927.

また別に L. Walther (La Technopsychologie du Travail industriel, 1926)はギーゼと同樣に、產業勞働に關する精神技術學を(一)勞働者の勞働に對する適應、(二)勞働の勞働者に對する適應、(三)兩者の混合問題の三に分つてゐる。そしてその各部分の主內容をなすものは、第一のものには職業心理と職業教育の問題、第二のものには勞働過程と勞働要具の問題、第三のものには疲勞の問題がある。

註一八　Lipmann; Wirtschaftspsychologie, S. 11.
註一九　Giese; Methoden, S. 239 ff.
註二〇　ebenda, S. 5.
註二一　Münsterberg; Psychologie und Wirtschaftsleben, S. 95 ff.

四

以上の簡單な吟味から、吾々の先づ記憶して置かねばならぬ點は、經濟心理學がその實踐を通じて經營の能率增進に役立つものであるといふ點である。そしてこの點から私は從來の經濟心理學の本質を決論しやうとするものであるが、未だ問題は殘されてゐる。

先づミュンスターベルクの經濟心理學の本質に關する見解から見て行かう。彼が繰返し述べる所に從へば、經濟心理學は他の總ての技術學と同樣に、一定の目的に對してそれが如何にして解決せられ得るかの手段を決定することが任務であつて、自らは目的の決定を行ひ得ないものである。究局目的の決定、目的に關する一切の價値判斷は倫理學或は文化哲學の問題であり、また個々の目的の選定は實際家の行ふ所であつて、經濟心理學の問題ではあり得ないし、また精神技術學者の行ふ所ではない。精神技術學者は完全な、客觀的な中立性を以つて、一定の目的とそれに到達すべき手段との間の心理學的因果關係を追及する。かくて彼は保護貿易論者でもなければ自由貿易論者でもなく、社會主義者でもなくまた反社會主義者でもなく、資本家の代表者でもなければまた勞働者の代表者でもな

い。只だ彼が一定の目的を無條件に前提する場合には、その目的が經濟社會に取つては云はゞ自明のものとして妥當し得るものに過ぎない（註二二(1)）。經濟心理學はかくて實際經濟社會の要求に應じて、先づミュンスターベルクに依つて、經營の能率增進問題を採用した。しかし元來彼自身は心理學者であると同時に價値哲學者であつた（註二二(2)）。しかも吾々は價値哲學者としての彼のこの一面から、右の點に就いて、これ以上の結末を彼の經濟心理學に於いて見出し得ないことは遺憾である。F. Wuuderlich は彼を評して凡そ次ぎの如くに云ふ。目的の設定は文化哲學者に依つて精神技術學者に與へられねばならぬと、ミュンスターベルクは云ふが、果して事實そうであつたか。文化哲學者が分業の擴大、最大能率の增進を希望したのであるか、或は寧ろそれを慾したものは資本家ではなかつたか。心理學者は資本家の訓令を受けんがために科學の自立性を放棄したのではないか。勞働階級が、何人のために勞働が節約せられるか、を問ふのは正しい。即ち生產力の增大は社會全體のために役立つのであるか。生產手段の所有者である資本家階級のためであるか。或は收益の增大に參加する勞働者のためであるか。確かにミュンスターベルクは社會倫理若しくは國民經濟の設定する價値ある目的に就いて述べてゐるが、しかし彼はその利害が單に收益と利潤にのみある資本家階級に依つて與へられた問題を擧げてゐる（註二三）。

このウンダーリッヒの批評は大體當つてゐる。ミュンスターベルクが商工業上の實踐的要求として選んだものは、事實利潤の追及を唯一の目的とする資本家階級の能率增進の要求に過ぎなかつた。かくて今日の經濟心理學はその誕生と共に利潤のための科學として存在した。或は寧ろ資本家的要求が經濟心理學の成立を可能にしたと云ふ方が正しいであらう。そして彼以後の經濟心理學の發展も亦、事實この資本家的な要求に忠實に奉仕することに依つてのみ、可能にせられたと見做さるべきものであつて、從つて今日の經濟心理學がまた同時に、資本主義諸國に於いては利潤のための科學たらざるを得ない。蓋し經濟心理學は實踐的な科學として、理論的な方面ではなくてその實踐的應用を重要視するものである以上、當然資本家的實踐、資本主義の要求の內にその問題を見出して行かなければならないからである。そしてまた資本家的要求は原則として利潤の追及を可能にするもの以外には及ばない（註二四）。

しかし既に述べたやうに、今日の經濟心理學者は、ミュンスターベルクも亦、彼等の經濟心理學が單に利潤のための科學であると見做されることを慾しない。既にテイラーでさへその能率增進の社會經濟的意義を說いて、それは單に資本家の利益である許りではなく、また勞働者の利益でもある、能率の增進は賃銀の增大を伴ふから、また更らに能率の增進は生產費の低下を意味し、從つて生產物の價格の低下は一般の消費者、社會全體に取つても有利である、と見做したことは人のよく知る所である。經濟心理學者も先づこれと同樣の見解を持つものであると云つて宜からう。即ち彼等は資本家の利益のみではなく、勞働者に對しても亦經濟心理學的實踐が有利であることを說き、或は國民經濟の細胞は經營であり、經營の繁榮を措いては全體としての國民の經濟生活の繁榮は考へられないと說くであらう（註二五）。しかし應用心理學者が眞面目に經濟心理學の社會經濟的意義を說かうと思ふならば、徒らに從來の通俗經濟學說に動されないで現實社會をよく觀るがよからう。生產力の增大に關する資本主義の實踐は、今日に至るまで決して調和ある社會を生み來たしては居らぬ。それ許りではなく、生產力の增大は今日では却つて經

濟生活の繁榮の基礎ではなくて、過剰生產力の處理にさへ資本家自身が苦しまざるを得なくなつてゐる。そして世界の一部分の傾向は、單に利潤の追及のみをこゝとする資本主義を何等かの形で抑制しやうとしてゐる。私は決して應用心理學者の經濟學的認識の不足を指摘することが目的ではない。唯だ彼等の精神技術學的實踐が今日に至るまで資本家的要求に堅く結びつけられて來てゐることを先づ指摘すれば足るのみである。

前節に於いて、私は職業指導の問題も亦他の精神技術學的實踐と同樣の意義を持つに過ぎないことを指摘して置いたが、それは如何に說明せられ得るものであるか。元來職業指導の問題は社會政策的意義を持つものとして發展して來たものであつて、また現にそれは主として公共團體の社會政策的施設を中心に行はれてゐる。從つてそれは先づ資本家的經營の手に於いて行はれる他の精神技術學的實踐とはこの點に於いて異つてゐる。更らに職業指導は、適性檢査 Eignungsprüfungen に依つて適職者を多數の就職希望者中から選拔するといふ雇主側の方法とは異つて、先づ何等かの職業に就かんとするものに對してその個性を鑑別し、彼に最も適當せる職業を選定し、これに就かしめることを理想とするものである。そしてこれに關する精神技術學の問題は、第一に個性の鑑別であり、第二に各種職業の心理學的分析である。この二方面の應用心理學的研究と方法の完成を俟つて、各人をしてその最も適當とする方面に就職の機會を見出さしめ得るものであつて、全く偶然の機會に依つて職を見出し、人の一生を誤らしめることを避けやうとする所に、正にその社會政策的意義が認められてゐる。しかしこれは理想であつて、實際の職業指導はこの理想からは未だ遠いものである。その第一の理由は、右の二方面の應用心理學的研究とその實踐的方法が未だ理想的のものではなく、從つて積極的に適職を指導することは困難であつて、單に消極的に不適職の警告を個人に與へ得るに過ぎない。更に、第二に、そしてこれこそ正に重要な理由であるが、假令個人に對して適職が選定せられても、現實の經濟社會ではその方面に空席があり、雇主が喜んで人を向へるとは限らないのであつて、結局は地域的にも制限せられて僅かに限られた職業に個人を就職せしめ得るに過ぎない（註二六）。しかも多數の就職希望者のために豫め就職口を廣く開拓し求めて置くことが必要であつて、從つて職業指導には雇主側のそれに對する理解と積極的に好意ある參加とを望しいとせなければならぬ。かくて右の第一及び第二の實際的理由から、此處に行はれる職業指導が、雇主に代つて社會政策的機關の手に於いて、有能なる勞働者を見出すといふ事實は、何人もこれを否定し得ないであらう。特にまた往々にしてこの場合個人の愼重なる個性の鑑別ではなくして、適性檢査が便宜上利用せられることのあるのは云ふまでもない。

實際の問題としての職業指導が既にかくの如きものであるとしても、應用心理學者達は決してその理想を捨てるものではなく、彼等は精神技術學的方法の完成を期して問題を理想的に解決しやうと慾してゐる。しかし現實の經濟社會が資本主義的に確立せられてゐる限り、廣く雇主を統制して勞働者を合理的に各種の職業に配置することは原則として困難である。加之、一般的には職業指導は、それに附せられる社會的意義の如何を問はず、資本主義の下に於いては資本家的經營に對して有能なる勞働者を配置するものであり、その方法の如何を問はず、經營の能率增進のために雇主の行ふ職業的選拔に代るものであるといふ事實は、何人もこれを否定し得ないであらう。H. Sachs

は單に職業指導の問題のみならず、各經營に於いて行はれる適性檢査をも含めて、一切の職業心理學的實踐はこれを公共機關の手に於いて行はしめることに依つて、その社會政策的、國民經濟的意義を充分發揮せしめることが可能であると考へてゐる。蓋しそれに依つて實現せられる所のものは透徹せる勞働力の合理的な配置であるからである(註二七)。しかしこのプラトニックな理想が現實社會の資本主義的な精神に依つて蹂躙せられなければ幸ひである。(註二八)

かくて吾々は、應用心理學者の社會政策的、國民經濟的意義の主張あるに拘らず、一切の經濟心理學的實踐が第一義的には資本家的意義を持つものであり、その社會的、國民經濟的意義が遙かに第二義的のものであると見做し得る。從つて經濟心理學が資本家的な科學であり、利潤のための科學であることは、應用心理學者が有する斯學に對する動機に依つては否定せられ得ず、それは客觀的な事實として常に吾々の眼前に存在する。

吾々のかくの如き批評に對して、尙ほ反對論の存在は豫想せられる。私自身もある機會に、經濟心理學は單に實踐的な一面丈けを持つものではなくして、實踐的方法の確定に先き立つて嚴密な科學的――中立的――客觀的研究を必要とするものであり、其處では資本家的意義も勞働階級のための意義も全然存在し得ない、との主張に對したことがある。またリップマンは、科學に對しては不道德は主張され得ない、科學上の問題設定、科學的方法は不道德的たり得ないものであると主張する。ある科學的方法を以つて假令不道德な結果が得られ得ても、科學的方法がそれ故に非難せられ得るものではない。この非難は唯だ科學的方法の利用に際して問題となる。そして彼は、科學に取つてはその科學の利用が人の肉體的、精神的傷害を引起す場合に科學的方法の利用の限界が與へられてゐる、と云ふ(註二九)。私は此處で決して經濟心理學を倫理的に批判しようといふ意圖を持つてはゐない。しかし私の批評に對しては、恐らく右のリップマンの見解と同樣にして、經濟心理學を一應その實踐的な部面とこれを基礎づける所謂科學的な部面とを區別して、經濟心理學自體は全く中立的であつて、それは資本家のための科學でもなければまた勞働者のための科學でもないと、主張せられるかも知れない。勿論吾々は此處で科學的方法の檢討を問題としてゐるのではなく、それが客觀的に如何なる社會的意義を持つかを問題としてゐるのである。そして右の如き所論は經濟心理學に於いて、個々の實踐的な部面を所謂科學的な部面から引離して考へやうとするものであるが、少くとも實踐的な科學に於いてはそれは不可能である。即ち實踐的科學に於ける理論的な研究は暫く實踐的應用の方面から離れて、單に現象の理論的究明をことゝするものであつても、それはその科學の持つ一般的な實踐的目的から離れたものではあり得ない。勿論科學と應用科學の發達の歷史の上では、科學者の理論上の發見が後に至つて何等かの實踐的應用を見出したといふ例はある。しかも一つの實踐的科學に於いてはその固有の實踐的目的から離れて、これとは全然無關係な研究は、もはやその科學に屬するものであるとは見做し得ないのである。かくて經濟心理學に於いては、その一切の研究が經濟心理學に屬するものである以上は、假令それが結果に於いて實踐的應用を可能にしないものであつても、それは決して經濟心理學の實踐的な目的と無關係ではあり得ない。換言すれば、經濟心理學の實踐的目的がその一切の科學的研究に方向を與へて居り、またかくしなければならないのである。從つ

て理論的方面を個々の實踐的應用の方面から切り離して、吾々の批評を免れやうとすることは不可能である。

經營の能率增進問題は資本主義の最初から努力せられて來た問題であつて、それは多方面の問題を含んでゐる。その內經營の人的要素に關する能率問題が特に重要視せられるに至つたのはテイラーの科學的管理法の運動が勃發して以來のことであり、これに動されて、心理學の方面からこれに近づかうとしたのがミュンスターベルクの經濟心理學であつた。そこで經營の能率增進問題、今日の資本主義的合理化問題の內で經營の人的要素が如何に取り扱はれるか、を見ることは、經濟心理學の問題の性質を明かにし、その意義を決定的に明白にする所以である。

資本主義的生產方法の下に於いては、生產手段の所有から離れてゐる勞働者階級は、その生活維持の必要上、當然彼等の勞働力を資本の所有者に賣却しなければならぬ。そして一度賣却せられた勞働力は資本家がこれを自由に處置し得る所であり、資本家に取つては勞働者は他の物的な生產手段と同樣に、生產を現實的に可能ならしめる手段としての存在以上のものではない。其處では勞働者が生產の主體であるのではなくて、彼等は單にその客體たるに過ぎないのである。かゝる歷史的現實的關係の下に於いては、勞働者は單に勞働能力を有する客體に過ぎないと觀られることは當然であつて、その能率增進問題は、如何にすれば勞働能力が强大ならしめられるかといふ問題に歸着する。そしてこの問題の解決に際しては、從來物的技術の方面に於いて尊守せられて來た經濟主義の原則が、人間の勞働能力に關しても亦適應せしめられる（註三〇）。

私は既に經濟心理學が資本家的意義に於ける能率增進をその固有の實踐的目的として有してゐること、そして應用科學としての性質上、この實踐的目的から科學全體が方向づけられてゐると說いたのであるが、正に經濟心理學に於ける能率增進問題は右の資本家的觀點をそのまゝ踏襲したに過ぎないのである。ミュンスターベルクが能率問題の應用心理學的解決を經濟主義の原則に基づけたことは既に述べた。今日例へばウェバーの如きも亦この同じ觀點から、經濟心理學が寧ろ「經濟性の心理學」Wirtschaftlichkeitspsychologie と稱せられる方が適當であると考へてゐる（註三一）。また吾國の一連の應用心理學者達は、この點に就いては、人間力の合理的な利用を目的としてゐるといふ目的に從ふものであり、從つて產業的精神技術學の有ゆる實踐的方法が究極勞働合理化、或は作業の最善なる構成ところの勞働經濟に全く歸屬するものであると見做してゐる。彼が勞働能力を問題の中心と考へてゐることは云ふまでもないが、更らに彼の云ふ所に從へば、「吾々は作業人格を以つて一切の作業機能の總體であり、その關係點であると見做し度いのであつて、その作業はそれ自體、またその根源に關して作業人格と全人格の統一に於いて研究せられるべきものである。」（註三三）かくて經濟心理學は人間に就いて單に彼の勞働能力だけを、精神技術學的に、問題にするに過ぎないのであり、またその一切の心理學的研究はこの勞働能力との關聯に於いてのみ考へられ、實踐化せられるものであると云つている。ミュンスターベルク以來今日に至るまでの經濟心理學の問題の性質がかくの如きものであることは、經濟心理學が正に勞働者を以つて單なる手段以上のものとは見ない資本家的觀點をそのまゝ踏襲してゐるものであることを明白に示してゐる。そしてそれは資本家的意義に於ける能率增進問題をその固有

の實踐的目的として採用した經濟心理學の當然の歸結であつて、この問題の性質こそ決定的に經濟心理學をして資本家的な科學であり、利潤のための科學たらしめてゐるものであると云はなければならない。若し心ある應用心理學者にして吾々の批評を甘んで受けることを慾しないならば、宜しく資本家的精神の羈絆から逃れて靜かにその取扱ふ所の人間と彼の意識生活とを考へて見るがよからう。

しかしこの問題は單に以上の檢討丈けを以つて充分であるのではない。寧ろ重要なのは、今日までの經濟心理學が如何なる心理學的基礎の上に立つてゐるか、を檢討して見ることである。そしてそれは以下に於ける私の問題である。

註二二（一）　Münsterberg; Psychologie u. Wirtschaftsleben, S. 18-20.

註二二（二）　Derselbe; Philosophie der Werte, 1907.

註二三　F. Wunderlich; Hugo Münsterberg's Bedeutung für die Nationalökonomie, 1920, S. 77-78.

註二四　本質の問題である經濟心理學の意義に關しては、私は度々これを述べたことがあるが、その內讀者は左のものを參考にせられ度い。

　拙稿、精神技術學の危機。（三田學會雜誌、第二十六卷　第十號）

　拙稿　Psychotechnik の意義に就いて。（心理學論文集Ⅳ　一九二－一九六頁）

註二五　ミュンスターベルク自身も經濟心理學的實踐に依つて能率が增進せしめられる場合には、先づ勞働時間は短縮され、賃銀は增大し、生活水準は高められ得ると述べ、更らに能率の增進、生產力の增大がドイツの國民經濟をして世界經濟中に勇躍せしめるためにも、經濟心理學の貢獻し得る所を無視すべきものでないことを說いてゐる。（Psychol. u. Wirtschaftsleben, S. 181 ff.）吾國でも、例へば淡路圓次郎氏の如きは職業心理學の社會政策的、經濟的意義を認めやうとする。（同氏著、職業心理學　一一頁以後參考）

註二六　淡路圓次郎著　職業心理學　五八五頁以後　參照。

註二七　H. Sachs; Zur Organisation der Eignungspsychologie, 1920, Schr. z. Psychol. d. Berufseigu. u. d. Wirtschaftslebens, Heft 14.

　Dieselbe; Die Träger der experimentellen Eignungspsychologie, 1923, dieselben Schr., Heft 25.

　Dieselbe; Psychologieund Berufsberatung, 1925.

註二八　英國に於ける經濟心理學の理論的並に實踐的中心機關である「國民產業心理學研究所」の本來の目的は、產業上の人的要素に對する心理學の應用にあるが、それは常に社會のために、實に人類一般のために役立つて來たものであつて、從つて法律上では常研究所は慈善團體であり、その事業は主として慈善的である、と主張せられ且つかくは認められてゐるのである。しかもその主として慈善的であると主張せられる所以は、同研究所の職業指導の問題に對する貢獻にある。（H. J. Welch and C. S. Myers; Ten Years of Industrial Psychology, 1932, p. 93 ff.）

註二九　Festschr. W. Stern, 1931. S. 180.

註三〇　能率增進問題、合理化問題の本質に關する見解に就いては次きのものを參考とせよ。

　拙著　產業合理化（世界經濟問題講座、第三回）

　拙著　資本主義產業と技術の問題（同講座　第五回）

註三一　W. Weber; Praktische Psychologie, S. 13-14.

註三二　松本亦太郎　人間工學（心理研究第百號、三三三―三三四頁）
　　田中寛一著　人間工學（五版）第一章。
　　淡路圓次郎著　職業心理學　序文。
註三三　Moede; Lehrbuch der Psychotechnik, I, Bd. S. 3 u. 12.

第二部　人間技術學の目的と社會心理學的問題

一

經濟心理學は應用心理學の一部門である。しかしそれは單に既存の心理學的知識の實踐的利用を意味するのではない。特に實驗室内に於ける純粹理論的心理學の所產に就いて云へば、直ちにその實踐的な利用は多くの場合には不可能である。蓋し心理學の純粹理論は現實生活に於ける心理的諸現象からは稍遠いもの lebensfern und lebensfremd であり、應用心理學は寧ろ現實生活に即した lebensnah 事實の心理學的確定を必要とするからである。換言すれば、應用心理學を基礎づけるものは心理學の抽象理論ではなくして、現實的な心理學的研究である。既に述べたやうに、各應用心理學はそれに固有の、何等かの實踐的目的を有するものであり、その固有の實踐的目的に從つて吾々の實際生活の内にその實踐的に解決せらるべき問題を見出すのであるが、この問題の具體的な解決に近づき得んがためには、個々の場合の現實的な心理學的研究が必要である。勿論應用心理學は理論心理學と無關係であるのではない。應用心理學が人間の現實意識を問題とする場合、純粹理論的心理學が意識の形式的構造を明かにするものとして重要であることは云ふまでもなく、また、多くの場合にその問題は個人差の事實に基づくものであつて、從つてこれに關する理論心理學としての差異心理學、素質、個性に關する理論的研究が應用心理學の基礎をなすと考へられてゐる。しかも應用心理學の任務は單に理論心理學の所產を實踐的に利用するといふ點に存するよりは、寧ろその固有の實踐的目的から選定せられた問題を持ち、この問題の解決に近づくための適當な方法を確定し、現實的な研究の上に個々の問題の解決を眞に可能ならしめることが遙かに重要である。かくて應用心理學はその固有の問題と方法に依つて一獨立科學としての存在を可能にせられる。

先きに論じたやうに、從來の經濟心理學は資本家的意義に於ける能率增進問題の解決に努力して來てゐる。人間の勞働に就いて云へば、資本家的觀點の影響の下に、單なる手段としての人間力の合理的な利用を目的としてゐる。そして此處で人間が如何に手段として取り扱はれるかは、經濟心理學を基礎づけてゐる心理學的見解を一瞥すれば更らに明かである。ミュンスターベルクは應用心理學を基礎づけるものは、意識内容に關する記述的、說明的、因果的心理學であるとしたのであるが、「吾々が他人をば一自我と解することなく、自然現象の連鎖中の一部分であり、吾々がそれを利用し若しくはそれに影響を與へる手段なりと解する場合に初めて、吾々は人爲的な因果心理學的觀察に移り行く」のであつて、「吾々が精神生活の客觀的、因果的理解ではなく、主觀的、目的的理解に依つて支配せられるに至るや、直ちに應用心理學は問題となり得ないものとなる。」（註一）そして彼は此處に精神技術學の限界を見出したのである。彼のこの因果心理學に關する當否は暫く別として、彼のこの見解に對してウンダーリッヒが、

資本主義が技術學に基づいて機械の最高能率を慾したのと同じく、彼の精神技術學に於いては「勞働者の作業能力が原料若しくは機械の能力と同じ意味に於いて觀察せられる。勞働者は生産手段としてその收益性のために研究せられる。」(註二) と評したのは誠に當然である。彼以後の經濟心理學も亦略、これと同樣であつて、その總ての心理學的諸研究は一つに勞働能力に關聯せしめられてゐる。即ち個性、素質に關する心理學的研究、個々の精神的機能の分析的研究は、それ等が作業能力の大小と如何に關係するかを問題とし、更らに社會的、集團的環境の社會心理學的研究は、それの個人の能力に對する、若しくはある集團の全體の作業能力に對する影響を明かにすることを目的とし、或は勞働者に對する教育、訓練を通じて、また勞働者の實際作業に於ける監視と統制とを通じて彼等の最高能率を實現するための基礎とせられてゐる。かくてまた彼以後の現在の經濟心理學に取つても、人間は單に經營の一要素に過ぎないといふ、經濟的唯物論的概念が特徴的であり、その取り扱ふところの人間が單に「ものを云ふ要具」instrumentum vocale に過ぎないと觀られることは當然であつて、(註三) これは正に近代的大産業經營の物化、非人格化、非精神化、即ち合理化の一般的傾向に屈從するものであり、更らに極端に云へば、精神技術學の任務は正に資本主義的生産の下に於ける勞働者の奴隷化といふ事實に相應するものであると云はなければならない。そしてこの意味では、從來からの經濟心理學は正當に資本主義的(或は資本家的)經濟心理學、また簡單に能率心理學と呼ばれ得るものであらう。

資本主義的生産が單なる生産手段としての勞働者から最高能率を要求することは明かであるが、これに對して、科學の名に於いて、最初に答へやうとしたものがテイラーの科學的管理法であり、次いでミュンスターベルクの經濟心理學であつた。そして前者に於ける銑鐵運搬のシュミットの例が――その後にこれは種々の方面からの批評を蒙し今日の經濟心理學者は專ら社會政策的見解の影響の下に、少くともかくの如き露骨な最高能率の原理をもはや固持するものではなく、これに代つて彼等は勞働者の能率に就いて最適度 Optimum を要求する。既に C. Fiorkowski は人間は決して機械ではなく、最高能率の發揮に依つて作業者の文化的、若しくは人格的價値が助長せられるか、或は損傷せられるか、また作業過程のかくの如き合理化が作業者の福祉に如何に影響するかを考慮することなく、最高能率を期待すべきものでないと主張し、經濟心理學に取つては das eudämonistische Optimum の考慮が重要であるとした。そしてその謂ふ最適度は勞働能力の早期枯渇と勞働喜悦の過度の減少の危險を避けるにあるとした。(註四(1)) 英國の産業心理學もこれと同樣に、勞働者の保健問題が最も重要な問題であることを認めてゐる。(註四(2)) しかしこの勞働能率の最適度を明確に規することは、少くとも能率心理學の問題としては困難である。例へばリップマンの見解に從へば、「吾々は生産せられる財貨の一定量から出發して、如何にすればこの一定量が出來るだけ經濟的に、即ち原料と勞働力の出來るだけ僅少な消費の下に生産せられ得るかを問題とするか、或は吾々は一定量の勞働力から出發して、如何にすればこれが出來るだけ僅小の勞働力を以つて、財貨の生産のために利用せられ得るかを問題とし」なければならぬとする。此處で吾々に取つて重要なのは、例へば右に云ふ最小の勞働力が心理學

的には如何に規定し得られるかの點にある。若し應用心理學者が勞働の最高能率ではなくして、その最適度の原則を主張するならば、彼は寧ろこの點から出發すべきものである。しかし能率心理學の人間解釋からはこの心理學的問題の解決は困難であると云ふよりは、寧ろ不可能に近いと評すべきである。再びリップマンの云ふ所を聞かう。彼は、今日勞働者をして最高能率を發揮せしめ、明日はもはや彼等の勞働力が枯渇して了ふといふ方法ではなく、彼等をして出來るだけ長期間に渡つて出來るだけ大なる勞働能力を保持せしめることが必要であると云ひ、且つこのことは勞働者の利益に一致し、また國家と社會の關心を惹くに充分のものであると考へてゐる。（註五(1)）かくの如き見解は元來勞働者の保健の問題であつて、心理學的にも勿論重要な問題ではあるが、それは寧ろ勞働生理學に於ける最適度の問題としてより明確に規定し得れるものであつて、（註五(2)）これだけでは吾々は其處に心理學的な問題を未だ明確にはし得ない。

更らに能率心理學者であるメェーデの見解に從へば、「産業的精神技術學は、私經濟的にも亦國民經濟的にも、經濟生活の有ゆる方面に於いて一般に心的エネルギーの最適度を得んと努めるものである。」そしてこの最適度は、勞働者に就いて見れば、「命令と能率、要求と能力との間に調和が存在する場合に、かくて素質、能力、經驗また時には希望と意志が勞働の經過を出來るだけ好都合のものたらしめるやうに、仕事が與へられる場合に存し、」且つ主觀の最小の費用に依つて最大の客觀的作業結果が生ずるやうに、人間の作業機能を最小ならしめる場合に實現せられる。かくて彼の云ふ心的エネルギーの最適度は總ての精神技術學的方法に於ける節約、善良、合目的性を意味するとせられ、それに依つて同時に人間の福祉が企圖せられ得ると考へられてゐる。（註六(1)）リップマンに比較すれば、メェーデのこの見解は遙かによく心理學的問題の要點に近づいてゐる。即ち彼の謂ふ主觀の最小の費用は、作業をして個人の主觀的狀態に對して最も好都合のものたらしめ得た場合に達せられるのであつて、其處では心理學的には個人の素質、能力、經驗が考慮せられ、また彼の希望と意志が問題にせられてゐる。そして彼は「勞働の强度は最適度或は最善度を現はすべきものであり、最高能率は原則として望ましいものではなく、また必要のものでもない。」と述べてはゐるが、（註六(2)）「最大の客觀的作業結果」が主觀の最小の費用に依つて實現せられることを說く。其處で彼の見解は最適度の原則を固持することが決して勞働能率の低下を來すものではなく、更らに最高能率の實現と相容れないものではないといふにある、と解すべきものであらう。そしてこの點こそ單に最適度の問題を特に取り擧げると否とを問はず、今日では總ての能率心理學者の共通の見解であるとも云つていゝ。かくて彼等は等しく、能率心理學の問題が作業過程の合理化、即ち科學化にあると說き、この科學化の方法に於いて初めて合理的な勞働能率增進が期待せられ得ると主張するであらう。

恐らく何人も勞働の最適度の實現が勞働能率の合理的な增進を結果するといふ見解を否定し得ないであらう。しかし吾々の問題は能率心理學者のかくの如き見解を再び檢討して見る點に存する。問題は能率心理學の基礎をなしてゐる心理學的見解、並にその心理學的方法が眞に勞働の最適度の問題を解決し得るか否かを吟味することにある。換言すれば能率心理學に於いて果して最適度の原則がその主張の如く保持せられてゐるか否か、更らにそれは果し

て可能であるか否かを見ることが必要である。この問題に就いては私は以下に述べる所に依つて抱括的に答へるであらう。しかし私は此處で讀者に對して左の一事を注意して置く必要である。

即ち能率心理學に於いては勞働の最適度の原則が主張せられるけれども、それは決して能率心理學の資本家的性質を何等變更するものではない。蓋し此處に於いても依然として勞働者は、高々機械とは性質を異にする所の、生產手段に過ぎないものであつて、その勞働能率の大小が第一義的な問題であることに變りはないからである。

註一　Münsterberg; Grundzüge der Psychotechnik, S. 38 u. 39.

註二　Wunderlich; H. Münsterbergs Bedeutung, S. 78.

註三　Eliasberg; Richtungen und Entwicklungstendenzen in der Arbeitswissenschaft, in: Archiv. f. Sozialwiss. u. Sozialpol. Bd. 56, 1926, S. 81.

註四(1)　C. Piorkowski; Die psychologische Methodologie der wirtschaftlichen Berufseignung 2. Aufl. 1919, S. V-VI.

註四(2)　H. J. Welch and G. H. Miles; Industrial Psychology in Practice, 1932, p. 5.

註五(1)　Lipmann; Wirtschaftspsychologie, S. 8.

註五(2)　勞働生理學の立場から、勞働の最適度を規定することは容易であり、且つ科學的に明確である。そしてこの方面ではドイツの勞働生理學者 E. Atzler の研究が最も著明であり、この勞働生理學上の最適度の原則を產業合理化問題に適用して著明であるのは J. Ermanski である。これ等に就いては讀書は次ぎのものを參考にせられ度い。

Atzler; Physiologische Rationalisierung, in: Körper und Arbeit, hersg. von Atzler, 1927, S. 409 ff.

Ermanski; Wissenschaftliche Betriebsorganisation und Taylor-System, 1925, S. 27 ff.

Derselbe; Theorie und Praxis der Rationalisierung, 1928, S. 20 ff.

註六(1)　Moede; Lehrbuch, I Bd., S. 2-5.

註六(2)　Eberida, S. 5.

二

吾々は先づ讀者と共に經濟心理學の實踐的目的に就いて反省することが必要である。經濟心理學は企業の能率增進といふ以外にその實踐的目的を選定し得ないものであらうか。應用心理學者自身が資本家と共に單に人間を以つて勞働能力の所有者に過ぎないと視なければならないであらうか。吾々が能率心理學をそのまゝ是認し得ないとすれば、吾々は當然別の實踐的目的を選ばなければならない。しかし吾々が能率增進以外にその實踐的目的を選ぶとすれば、それに依つて經濟心理學が一般に人間の文化的生活を促進するために、役立つものでなければならないことは素よりであるが、また科學としての經濟心理學の眞の使命がこの點に懸つてゐることも明かである。然らば吾々は經濟心理學の實踐的目的として如何なるものを選び得るか。

ミュンスターベルク以後の能率心理學者達は、徒らに彼等の科學の資本家的性質を隱蔽せんがために、經濟心理學の社會政策的、國民經濟的意義を說くことを忘れず、またそれが社會のため、人類全體のために役立つものであると高言してゐるにも拘らず、彼等は彼等の問題を決して反省しやうとしない。(註七) 然から經濟心理學の成立に先

つこと數年にして、H. Herkner はよく彼の社會政策的立場から、産業勞働に關する勞働生理學並に應用心理學の問題が勞働の苦痛の減少、勞働喜悦 Arbeitsfreude の增大にあることを指摘した。(註八) 更らに吾々はこの點に就いてはベルクナーを俟つまでもなく、ミュンスターベルクでさへ偶〻次ぎの如く述べてゐたのである。即ち、「經濟的實驗心理學は過度の、勞働に於ける心的不滿足、心的萎縮、壓迫及び心氣沮喪を全然除去する目的を以つて、職業活動を個人の心的特性に適應せしめることを以つて事實恐らく最高の任務とする。」と。(註九) エリアスベルクはこれに對して、「吾々は此處に初めて、ものを云ふ要具の物的技術 Sachtechnik に對立して、言葉の完全な意味に於ける人的技術 Menschentechnik に出逢ふ」と述べ、更らに引き續いて彼は次ぎの如く述べてゐる。即ち、「適當な場所に適當な人物を置くといふことは單に勞働の生産力、從つて消費の可能性を增大することではなく、かくてまた生産者(勞働者……著者)の職業外の生活を改善することではなく、それは先づ第一に生産的活動自體に對して喜悦、獨創性、本能と素質のための活動可能性を再び與へることである。」と。(註一〇)

かくて吾々は經濟心理學のために、勞働の能率增進ではなくて、生産的活動に於ける勞働者の精神的活動に對する一切の障害を取り除くこと、更らに積極的に云へば、勞働の喜悦を增大し、生産的活動を通じて彼等の個性を進展し、彼等の人格の發展の基礎を確保することを以つて、その固有の實踐的目的であると見做し得るであらう。そして此處に於いてこそ始めて勞働の最適度の問題が眞に考慮せられ得る。蓋しピオルコウスキーの言葉を借りて云へば、吾々のこの實踐的目的に從つてこそ作業者の文化的、人格的價値が全面的に問題とせられ得るからである。しかし吾々の問題は能率心理學者の考へるやうに單に生産過程、否經營内の問題に限られるのではない。即ち勞働者も尙ほ一人の社會人であり、また一定の社會的環境の裡に成育せられて來たものであつて、彼等の現實の職業活動以外の生活上の諸關係を考慮することなく、單に經營内に於ける彼等を問題とすることは尙ほ抽象的個人を取扱ふに等しい。蓋し生産的活動に於ける場合の勞働者の意識はまた彼等の職業外の生活上の諸關係と無關係ではあり得ないからである。從つて吾々の實踐的な問題のより多くの部分が、生産過程に直接或は間接に關聯して經營内で解決せらるべきものであるとしても、それはまた必ずしも單に經營内の問題に限られてゐるのではなく、經營外の彼等の生活上の諸關係とも關聯する。從つて吾々の目的は生産者としての勞働者の生活の全般を通じて、彼等の個性を進展せしめ、彼等の人格の發展の基礎を造り出すための實踐的方策を確定するにあると云はなければならぬ。

今日までの能率心理學が持つてゐた經營の能率增進といふ實踐的目的とは異なり、吾々が此處に右の如く經濟心理學の實踐的目的を規定し得るとすれば、これに從つて吾々の研究と實踐の方向も亦自ら異ならざるを得ないことは明かである。從來の應用心理學者は一般に、既に繰返し述べたやうに、人間を目して作業能力の所有者であるとし――これは寧ろ勞働生理學の觀點に相應してゐる――彼等の心理學的研究は總て究極この作業能力との關係に於いてのみ處理せられ――例へば、メューデの如きは勞働の喜悦、個人の持つ世界觀の如何が共に勞働能率の大小に重大な關係を有するものであることを見落して居らず、然かもこれ等の問題はそれ以外の視角からは取扱はれないのである。(註一一) ――且つその上に作業能力の增大、その合理的な利用、更らに彼等の好んで云ふ所に從へば、作

業能力の最適度の確保といふ方向の實踐が確立せられるのである。そしてこのために彼等の取り扱ふ問題は適材適所の理想を實現しやうとする職業心理、作業教育、作業の合理化の三群に分割せられて、彼等の經濟心理學の主内容を構成してゐる。しかし吾々の問題は生産過程に於け單なる生産手段、生産の客體としての勞働者ではなく、獨自の精神生活を營む主體としての人間から出發しなればならぬ。かくして右の實踐的目的から、當然吾々の心理學的研究の方向は生産過程に於ける勞働者の現實意識、彼等の勞働體驗、更らに全般的には勞働者の心理の現實的な究明に向はなければならない。そして吾々は此處に初めて、ミュンスターベルクの言葉を借りて云へば、心的不滿足、心的萎縮、抑壓と心氣沮喪の事實を見出し、その原因を探及することが可能であつて、これに基づいてまた眞實の勞働の最適度に關する實踐的方策の確立も可能となる。しかし勞働者の現實意識、彼等の勞働體驗は單純な現象ではなく、複雜な構造を持つ一體として現はれる。それは一方では主觀的な條件、各人の個性に基づき、他方では客觀的な條件に規定せられて成立する。この客觀的な條件の内に吾々は、生産過程に直接關聯するものとして勞働の對象と道具及び機械の如き物的技術上の諸施設とを擧げることが出來、更らにそれ以外の經營の諸施設、例へば福利增進施設の如きものを擧げ得るのであるが、吾々はまた經營内に於ける一切の社會的關係を忘れてはならないと同時に、經營外に於ける彼等の社會的諸關係とその生活を滿してゐる一切の客觀的事情とを考慮しなければならない。換言すれば、經營の内外に於ける勞働者の生活の物的並に社會的環境の一切を彼等の現實意識に關聯せしめて觀ることが必要である。O. Biener は勞働體驗の機能的形態を合理化するためには、經營組織の科學的、技術的改造と勞働者の教育といふ二つの道を選ばなければならないと述べてゐるが、更らに吾々はまた彼と共に、吾々の實踐的な問題が單に經營政策の問題に關係する許りではなく、更らに廣く一切の勞働者政策の問題に關係すると云はなければならない。(註一二)

しかし吾々の場合に經營政策並に一般の勞働者政策の問題は二重の意味に於いて觀られなければならない。即ち第一にはそれが勞働者の現實意識に對して如何なる影響を與へるかゞ問題である。蓋しそれは必ずしも吾々の實踐的目的と矛盾しないとは限らず、またそれは吾々の企圖する經濟心理學の研究に基礎づけられてゐるものでないからである。從つてこの意味では此處に關係する一切の政策が吾々の實踐的な目的から批判を受けることは當然である。そして第二に吾々の實踐的問題自體が勞働者政策として現はれて來なければならぬ。更らに從來の能率心理學も亦その實踐に於ては經營の科學的、技術的組織の問題に關係し、また勞働者の教育問題を重要な一項目として取り上げてゐる。しかし既に實踐的目的を異にする以上、この同じ問題の取扱ひ方も吾々の場合には自ら異なるものであることは當然である。即ち例へば適材を適所に置くことは、能率心理學者に取つては、勞働能率の增進のための第一歩であり、勞働者を教育し、訓練することはその第二歩であり、作業方法、作業環境を合理化することがその最後の問題である。そして彼等はこれ等の問題に於いて、素質、個々の精神的機能が實際の作業と如何に關係するかを確證しやうとし、實際作業に關する彼等の研究は專ら作業高の大小とのみ關聯せしめられて、往々にして心理學的な問題が何處にあるかを疑はしめ、その然らざる場合にあつても眞に心理學的な問題は輕々に取り扱はれて

ゐるに過ぎないやうな場合が多い。これに對して吾々の問題は常に勞働者の現實意識に關する心理學的研究に基づいてのみ實踐的に解決せられなければならない。例へば、吾々は作業の客觀的條件の一つである照明の問題を例に採つて見やう。これに關する應用心理學者の第一の問題は、最高の能率が如何なる光度に對應するかを實驗的に決定することにある。そしてこの問題の解決に際して心理學者は、全く申譯けのやうに、最高能率の實況を可能にするやうな照明の下に於いては、勞働者は他の場合よりも比較的安易に作業し得ると附け加へるであらう。しかし吾々の問題は決して如何なる光度が最高能率を條件づけるかといふ點に存するのではなく、種々なる度合の照明が勞働者の意識に如何に反映するかといふ點に關聯し、實踐的にはこの客觀的條件を變化することに依つて、彼等の勞働體驗を彼等自身に取つてのみ好都合なものたらしめるにある。そしてこの點にこそ直接心理學的問題が存在するのであつて、若し多くの應用心理學者の如く、作業の一客觀的條件と作業結果との量的比較を研究の主内容とするならば、その兩者の間の因果關係は單に心理學的な問題として說明られる許りではなく、時には寧ろ勞働生理學的によりよく說明せられ得ることもある。かくてこの種の問題に於いては多く勞働生理學と作業心理學の研究の限界が不明瞭であり、且つまた事實に關する心理學的說明が輕視せられてゐる場合には特に然りである。しかし應用心理學者は、その個々の實踐的な問題が常に心理學的に充分說明し盡されることを俟つ必要はなく、宛かも電氣が理論的に說明し得られる以前に既に實際上の利用を得てゐたのと同樣であると考へるであらう。かくて「作業の進行、その前提諸條件とその關係の測定は、作業の基礎をなす意識過程の内面的機構の充分なる洞察が行はれなくとも、全く行ひ得る」ものであつて、これこそ總ての實踐的應用科學の長所であると見做されてゐる。(註一三)　かくの如くにして理論の問題でなく、實踐的問題の現實的解決を生命とする能率心理學が能率增進といふ實踐的目的を固執せんとするならば、應用心理學者達は寧ろ彼等の心理學的立場を宜しく揚棄して科學としては、「作業能 Leistungsbereitschaft の諸條件(諸決定要因)とその諸徵候とに關する科學である」と定義せられるリップマンの勞働科學のやうなものを建設する方が、彼等としては遙かに賢明である。そしてまた確かにある意味では、勞働能率增進といふ資本家的要求が、能率心理學を超へて、リップマンの謂ふ勞働科學を成立せしめたと見做し得るのであつて、此處にまた彼の勞働科學の成立の社會的脊影があり、この社會的脊影の内に吾々はまた彼の勞働科學の資本家的意義を見落してはならない。そして資本家的な經濟心理學がこの勞働科學に轉身することが、現在の資本家的科學の一つの必然的な發展傾向であると見做し得るであらう。(註一四)。

註七　リップマンは經濟心理學の資本家的性質を尙ほよく認識し得てはゐるが、彼がこれに對して辯護しやうとする所謂中立的科學は、結局は能率の最適度の問題であるが、しかしそれは適當な賃銀支拂方法、利潤分配等々を通じて作業意志を增大せしめやうとする資本家的方策を擧げるに過ぎない。(Riedel; Arbeitskunde, S. 63-64.)　これをエリアスベルク流に批評すれば、經濟心理學的實踐を通じて、即ち勞働能率の增大に依つて資本家と勞働者とを同時に利益あらしめやうと考へることは、自由主義經濟學の樂觀論に賴るものであつて、また能率心理學の出發點をなしてゐる人間は古典經濟學に於いて假定せられてゐた人間に等しい。(Vgl. Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpol. Bd. 56, 1926, S. 80-81.)

註八　H. Herkner; Die Bedeutung der Arbeitsfreude in Theorie und Praxis der Volkswirtschaft, 1905.

註九　Münsterberg; Psychol. u. Wirtschaftsleben, S. 181.

註一〇　Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpol., Bd. 56, 1926, S. 79-80.

註一一　Moede; Lehrb. d. Psychotechnik, I Bd., S. 13.

註一二　O. Eiener; Das Arbeitserlebnis und seine Wandlungen, (Riedel; Arbeitskunde, S. 36-37.)

註一三　Moede; Lehrb., S. 33.

註一四　O. Lipmann; Lehrbuch der Arbeitswissenschaft, 1932.

拙稿、勞働科學に就いて、（三田學會雜誌第二十七卷、第五號）參考。

三

經濟心理學の實踐的目的、從つてその科學的研究の對象、その實踐的問題に關して、私は以上の批判的見地から、從來の能率心理學とは違つた方向を持つ精神技術學の存在の可能を示した。そしてこの新しい方向の經濟心理學の性質に就いて、既に上述の批評に依つて自ら推測し得られる所であるが、此處にこれを要約し、吾々の經濟心理學の本質を更らに明かならしめて置くことは必ずしも無益ではない。從來の經濟心理學、即ち能率心理學が能率增進といふ實踐的目的から出發して、勞働者とその環境（主として經營内に於ける作業環境、若しくは作業の諸條件）に關する應用心理學的研究に基づいて、資本家の利益のために答ふべき實踐的問題に專念してゐるのに對して、私の辯護し、今後その成長を期待する經濟心理學は勞働者の現實意識の研究に從つて彼等の精神的生活の滿足なる發展のため、換言すれば彼等自身の利益のための實踐的問題を探及しやうとするものである。前者がその本質上資本主義的、或は資本家的經濟心理學と正當に呼ばれ得るのに對して、後者は先づ勞働者のための經濟心理學であつて、正にその本質を異にするものと見做し得る。私は既に資本家の實際的要求である能率增進といふ理想を、經濟心理學の實踐的目的としてはこれを否定したのであつて、從つて吾々の實踐的問題は何處に於いても勞働者の能率の大小と直接關聯せしめられる必要はないのである。更らに極端に云へば、勞働者の能率の大小は敢て吾々の關心する所ではないとも云つていゝ。しかし吾々はこれに依つて決して勞働生産力の增進を積極的に否定しやうといふのではない。否な寧ろ吾々の問題は勞働能率の增進ではなくして、勞働生産力の增進に密接に關聯する。更らに正確に云へば、勞働生産力增進の眞に心理學的な問題を取り扱ふのが吾々の經濟心理學の任務である。一般の讀者に取つては、私のこの一見矛盾したかに見える言ひ表はし方は了解し難いものと思はれるであらう。此處で必要の限り極く簡單にこれに對する說明を附け加へて置かう。（註一五）

凡そ勞働の能率、强度及び生産力等の概念は、一方では學者がこれ等を概念上種々に區別しやうと努めてゐるが、他方ではまた全然これ等を區別することなく漠然と同語義のものとして使用してゐる。特に應用心理學の場合には勞働の能率とその生産力といふ二概念は全然區別せられてゐないと云つていゝ。しかし前者は資本家的な概念であつて、後者は國民經濟的、社會的概念である。前者は資本家的意義を持つ具體的な概念であり、後者は社會的意義を持つ抽象的な概念である。そしてそれは大體次ぎの如くである。資本家的な實踐に於いては勞働者は精神のない機械と並んで、宛かも物的な生産手段と同樣に取り扱はれる。即ち、機械の能率を增大すると同じ意味に於いて勞

働の能率增進が期待せられるのである。機械の能率は他の事情を暫らく同一のものとしてそれが生産する貨物の數量の大小に依つて決定せられるのであるが、勞働者の能率も同じく彼等が生産する貨物の數量に依つて計られる。そして資本家的實踐に於いてはこれ以外のものは全然無意義である。貨物の生産可能性の增大は確かに吾々の經濟生活の物質的な基礎を豐富にするといふ可能性を持つものであり、人は好んで此の點に於いて能率增進の國民經濟的意義を認めやうとする。しかしこの生産增進の可能性は資本家の恣意に從つて自由に紳縮せられるものであつて、それが單に利潤の大小に關聯してゐるといふ現實的な事實を抹殺することは出來ない。これに反して、かくの如き資本主義的生産の現實から離れて、勞働生産力の增進は次ぎの如き意味に解せられる。即ち人間の行ふ生産活動は生活上の物資の獲得のための、自然の環境への働きかけの過程である。そしてこの對自然の勞働過程を通じて勞働生産力の增大は先づ勞働力支出の相對的減少として現はれ、人間の自然征服力を增大し、そして總じて云へば人間の自由なる人格の發展の基礎を確實にする。しかしかくの如き勞働生産力の增大の意義は、資本主義的生産の現實的諸關係の下に於いては甚だしく歪曲せられて、前述の如き能率增進として現はれてゐる。

既に資本家的意義を持つ經濟心理學を否定しやうとする場合に、吾々が勞働能率增進の資本家的衣裳を取り除いて、其處に眞に勞働生産力增進の應用心理學的問題を求めなければならないのは當然である。かくして從來の能率心理學の資本家的意義に對抗して、現實的諸關係の下に於いては吾々の經濟心理學は勞働階級のための應用心理學であると主張せられ得るのであるけれども、究極その目的とする所が右の如き意味の勞働生産力の增大に資せんとするものである以上、現實の階級關係を離れては眞に此處に經濟心理學の文化的使命が窺はれ得るのであつて、此の點に於いて吾々の經濟心理學は能率心理學に比較して、科學としての存在の遙かに高い意義を持つてゐると云つていゝ。

勞働生産力の增大は機械、道具の生産上の物的要素の改良進歩に依つて大いに促進せしめられる。そして從來技術として考へられたものがこの意味に於いて、その國民經濟的意義を認められるのであるが、吾々も亦勞働者とその環境の心理學的研究に基づく干渉を通じて、勞働生産力を增大せんとするものであつて、從つて吾々の經濟心理學上の實踐も亦この意味では技術と呼ばれて適當である。そこで前者を物的技術と呼ぶに對して、後者を人的技術と稱し得るであらう。そして人的技術を問題とする經濟心理學は正に人間技術學 Menschentechnologie であり、從來からの言葉を用ふるとすれば、これこそ精神技術學である。

勞働生産力の增進が第一には勞働力支出の相對的減少を來すといふことは、心理學的には獨自の精神生活を營む生産的活動の負擔者としての人間に於ける精神的活動に伴ふ一切の苦腦を取り除き、彼等の個性を進展せしめるといふ意味に於いて生産的活動と彼等の精神的機能との調和を計ることである。そしてそれはまた同時に自然に對する人間の征服力の增大として現はれる。そして最後に生活上の社會的環境の内に生産者としての人格の發展を基礎づけることが重要である。これが勞働生産力の增大に對應する應用心理學の問題であつて、これは勞働者を以つて生産の客體であり、宛かも物的生産手段と同樣に手段視してゐる場合の、勞働能率增進問題の心理學的問題とはな

り得ないのである。勞働生産力增大の問題が資本主義的諸關係の下に於いて曲げられて、勞働能率增進問題として現はれてゐると云ふ理由の一つはこれであり、また吾々の問題が能率の增進に存するのではなくて、勞働生産力の增進にあるといふ所以である。

更らに前述の如く、今日の能率心理學は勞働の最高能率を要求せず、またそれを必要とせず、能率の最適度を要求してはゐるが、果して眞にその實現を期待し得るとすれば、彼等は宜しく彼等の經濟心理學の根本的立場を更改しなければならない。蓋し彼等の立場からは勞働能率の最高度と最適度とは、心理學的に明確に規定し得られない許りでなく、これを資本家的實踐に於いて區別することは尙ほ更ら困難であるからである。即ち最適度の問題は、心理學的には、主觀の費用の輕減問題――これが勞働生産力增大に於ける勞働力支出の相對的減少を意味するのであるが――である。從つて先づ彼等は勞働者を以つて生産過程に於ける一客體なりと觀ることを止め、單に作業能力の所有者なりと觀ることを止めて、自我としての勞働者の現實意識の究明、彼等の勞働體驗の分析から出發しなければならない。かくて最適度の問題は、心理學的には、資本家的能率心理學の問題ではなく、正當に吾々の問題として寧ろ初めてその眞實の解決に近づかれ得るものである。經濟心理學がかくの如き意味の人間技術學として直接能率の增進を目的としない以上、その實踐的な問題が資本家的經營の內に容れられるといふ保證は全然存しない。從つてまたその實踐のための現實的な研究が資本家の庇護を受けることも困難である。資本主義的學者は屢〻、學問の自由を云ふけれども、資本家的意義から離れた經濟心理學に取つては、現實の資本主義的生産關係の下に於いては學問の自由な發展が抑壓せられてゐる。そしてこれが寧ろ當然の運命である。しかし吾々は、テイラーの科學的管理法及びそれに續く能率心理學が屢〻、勞働者側の反對に苦んだのとは異なり、勞働者の積極的な援助の下に科學的發展を行ひ得るといふ可能性だけは充分ある。此の點では吾々は先づ勞働組合に對して、經濟心理學に對する理解とその勞働政策の基調としての經濟心理學の考慮とを叫ばなければならない。そして經營の內外を通じて吾々の實踐的問題が假令容れられる余地がないとしても、現實の經營政策と一般に經濟政策が勞働者政策の問題に關する限り、吾々はこれに對する嚴密な批評者の立場に立たなければならない。

更らに經濟心理學の範圍に就いて讀者の了解を得て置くことが必要である。從來の能率心理學は資本主義的經營の一般的な能率增進、換言すれば利潤の增大といふ目的に從つてゐたが故に、廣告心理學といふ問題をその重要な一項目としたのであるが、經營の能率の增進をその實踐的目的としない經濟心理學に取つてはもはやこの問題との關係は全然存しない。私の以上の所論が多く廣告心理學の問題を除外して來たのは、かくの如き觀點のためであつた。

註一五　拙稿　ソヴェート五ケ年計畫とその技術論（三田學會雜誌　第二十八卷　第三號　四一―四七頁　參考）

四

能率心理學から區別せられる、眞に人間技術學としての經濟心理學がその固有の實踐的目的に從つて、先づ勞働者の勞働體驗、彼等の現實意識の研究から始めなければならないことは旣に述べた。そしてこの研究の重要部分は

勞働者の一切の生活環境の心理學的研究からなる。しかも此處に再び指摘して置き度いのは、この生活環境の心理學的研究中その社會的環境に關する社會心理學的研究が遙かに重要な地位を占めることである。しかし勞働者の生活環境を簡單に自然的・物理的環境と社會的環境とに區別することは必ずしも容易ではない。特に多くの人爲的な施設が單に物理的環境としてのみ心理學的に研究せられることは不充分である場合があつて、寧ろそれに對しては社會心理學的考察が必要である場合を豫想することが出來る。例へば今日の工場に於ける諸種の福利增進施設の如きはこれであり、また賃銀の問題も社會心理學的考察に於いて初めてよく吾々の問題となり得る。かくの如く環境の區別は困難であるに拘らず、尙ほその社會心理學的研究が重要であることには變りはない。そして云ふまでもなく吾々の社會心理學的研究は、勞働者の社會的生活諸關係が彼等の現實意識を如何に規定してゐるか、彼等の勞働體驗の構造を如何に基礎づけてゐるかを觀ることを主眼とする。そしてこの種の研究は從來からの能率心理學には全然存しないのであつて、寧ろ能率心理學者以外に社會科學者の勞働者心理學として、正に氣息奄々たる地位を學界の一偶に僅かに持續して來てゐる。しかしこれとても吾々の社會心理學的研究の全般を蔽ふものでもなく、また必ずしも充分のものではなくて、吾々の研究のためにはその礎石としての意義を持つに過ぎない。これ等の諸研究に就いては何れ別の機會於いて讀者に紹介しやうと思ふ所である。

かくて從來の能率心理學に於いては、吾々を滿足せしむべき社會心理學的研究は存してゐないと云つていゝのであるが、其處では社會心理學的考察が全然欠除してゐたといふのではない。既にミュンスターベルクは彼の經濟心理學に於いて、集團心理學的、或は民族心理學的觀點から個人差を確定することが可能であると考へてゐたのである。即ち性別、種族、國民、年齢、職業、身分、都市と田舍の住民、山地と低地の住民等の如くその所屬を異にするに從つて、個人の心的特性が習慣的に異なるものとすれば、吾々はこの心的特性の個人差に從つて各〻それに適當せる職業の存することを考へ得る。但しミュンスターベルクに依れば、個人の心的特性は一集團内に於いて尙ほ著しく相異してゐるものであつて、ある個人はその集團の限界に立つてゐることがあり、從つてその集團に特徵的な望ましい特性が彼に於いては甚だ稀薄であり、或は全然存しないこともあり得る。從つて一個人ではなく多數人を雇用する場合に、ある集團の心的特性の平均値がこれ等の多數人に現はれてゐることを期待し得るのであつて、此處に集團心理學的考察が經濟上の利益を齎し得る。（註一六）そしてまたミュンスターベルクはこの問題と關聯して社會秩序に關する「社會的精神技術學」さへ企圖したのであつて、その目的とする所は「集團の最高能力、社會的任務の最善の實現が達せられるやうに、社會組織を構成する」にあつた。（註一七）ミュンスターベルクの經濟心理學に於ける集團心理學的考察は單にその問題を指摘したに過ぎないものであつたが、その後メェーデは實驗的集團心理學の建設に依つて、實踐的には教育學並に經濟心理學の範圍に於いて、作業能率の增大を期待し得ると考へた。（註一八）そして集團作業の能率に關する實驗的集團心理學的研究は、既に多くの心理學者に依つて企てられた所である。（註一九）しかしこの所謂集團心理學の問題は、個人的作業に對して集團的作業の場合を對立せしめ、集團作業の場合に於いては個人の作業に對する他人の存在の影響、即ち集團内の各個人の間の心理的相互作用の影響が、如何に

各人の作業結果に現はれるかを確定しやうとするに過ぎないものであつて、未だ吾々の場合の社會心理學的考察からは甚だしく遠いものである。そしてこの實驗的集團心理學的研究が嚴密に能率心理學の限界内に止つてゐることは、特に指摘するまでもなく明かである。

かくの如き集團心理學的研究に對して、既に今日の能率心理學者中には眞に社會心理學的研究に近づかうとするものがある。ギーゼは從來の經濟心理學の方法は余りに狹小であり、經濟心理學は特に人物處理と廣告の問題に於いては文化心理學的研究を必要とすると云ふ。(註二〇) そして彼はこのために特に平均人 Der Durchschnittsmensch の社會心理學的研究が如何にして行はれ得るかを示したのであるが、(註二一) 寧ろそれは吾々の場合の社會心理學的見解として重要な意義を持つものであることは見逃せない。かくて彼は人物處理の問題は「勞働の喜悅を得るにあり、且つ尙ほそれ以上に勞働の不快を抹殺するにある。」と述べてゐる。(註二二) また同じやうに F. Baumgarten は人物處理の問題に於いて、「以前には單に生きた生産手段に過ぎなかつた勞働者」が正に「人間」として取扱はれることを指摘してゐる。(註二三) 凡そこれ等の問題が社會心理學的研究に基づかなければならないことは既に述べた所であつて、しかも今日の能率心理學者中にはかくの如き問題に正當に近づいて來てゐるものゝ存するのは、應用心理學者がその心理學的立場に忠實に立つてゐる當然の結果であると云はなければならない。

しかし不幸にしてかくの如く正當に經濟心理學の問題に近づきつゝあるにも拘らず、勞働の喜悅を增進し、勞働の不快を取り除くことは人道的な理由からではなくて、寧ろ企業家と勞働者が結局は經濟的な繁榮に依つて、若し勞働の不快が現はれない場合には、共に幸福であるといふ考慮からであり、或は人物處理の問題は論理上の問題から離れて、單にそれは「資本の利廻りをより有利にし、よりよき利潤を齎らす」ことを目的とするものであると考へられてゐる。(註二四) これが尙ほ能率心理學者の社會心理學的研究に對する根本的な、資本家的な立場であり、その勞働の最適度の主張の本質が此處にある。能率心理學の限界内に於いてかくの如く社會心理學的研究から、尙ほよく勞働喜悅の問題が取り上げられ、また勞働者を以つて單に生きた生産手段と見ることなく、人間としての勞働者を取扱はうとする觀點が重要であるとせられても、その資本家的な立場は却つてその社會心理學的研究を不充分のものとする。特にその社會心理的學研究が不充分であると見做さなければならない點は、資本主義的生産關係の下に於ける勞働者の社會的生活關係、彼等の不運なる必然的な運命(失業)に關する社會心理學的考察が全然缺除してゐることである。(註二五) このことはギーゼの場合にも亦バウムガルテンの場合にも吾々の見逃し得ない點である。そしてかくの如き缺除が彼等の資本家的な立場、更らに換言すればその上に立つ自由主義的經濟學說の樂觀論、調和論——殆んど總ての、寧ろ例外なく、能率心理學者は經濟學的にはこの立場を採つてゐるのであるが——の立場に必然的に因由するものであると見做すことは不當であらうか！ 勿論、私は能率心理學者に對してその自由主義的經濟學的立場の妥當を爭ふことを目的としないのであるが、この彼等の立場が意識的に、或は無意識的に此處に私が指摘するやうな社會心理學的研究を恐らくは不必要なものとなしてゐることだけは、讀者と共に吾々の注意しなければならない點である。そして勞働の最適度の問題が個人の主觀的方面の問題である限り、能率心理學の基礎に於

いては未だ不可能であることも今や明かであらう。

能率心理學から區別せらるべき人間技術學は、その實踐的目的から、勞働者の現實意識に關する社會心理學的研究を當然重要視するものであるが、この場合の社會心理學的研究は、資本主義的立場の拘束から全く離れて、眞に客觀的な研究でなければならないし、また事實かくしてこそ初めてこれが可能である。P. Plaut はリップマンの勞働科學が勞働の經濟的價値を問題としてゐるのに對して、この謂はゞ資本家的立場から離れて初めてよく勞働の社會心理學的研究を系統化しやうと試みてゐる。(註二六) そしてかくの如き社會心理學的研究の方向に於いて、能率心理學から人間技術學への經濟心理學の異質的な發展が可能となる。

經濟心理學は一方に於いては單に人間の作業能力を問題とし、勞働能率の增進を目的とする限り、科學としては能率心理學からリップマンの謂ふ勞働科學への發展を必然的なものとすると見られ得るのであつて、それはまた他方に於いてはその心理學的立場を擴大することに依つて、勞働生產力の增大に貢獻しやうとする人間技術學への發展の契機を含んでゐる。そして前の場合は資本家的立場の必然的傾向であり、後の場合は資本家的立場の揚棄を意味する。然かも前の場合は心理學的立場の放棄であり、勞働科學は如何なる意味に於いても應用心理學ではあり得ないのであるが、後の場合は心理學的立場の擴大であり、それは直接或は間接に實驗室內の研究に關聯してゐる心理學的研究の及び得ない所の、社會心理學的研究を重要視するものであつて、問題の性質上吾々の當然開拓しなければならない心理學的研究の新分野である。

ギーゼとバウムガルテンが偶〻經營內に於ける人物處理の問題に關して社會心理學的研究に近づいたのであるが、それは確かに、從來の能率心理學上の總ての實踐問題が如何に科學的に實施せられ得ても、勞働の能率を最後に決定するものが勞働に對する、若しくは勞働に於ける勞働者の態度の如何に懸つてゐることを明確に認識せしめるものであると云つていゝ。しかもこの勞働者の態度の問題は勞働者の現實意識に關する詳細にして、系統的な社會心理學的研究に基づかなければならないのであるが、彼等の研究はその自由主義的經濟學的立場の是認に基づいて、稍〻不完全な社會心理學的考察に依つて徒らに樂觀的な結論を吾々に示すに過ぎない。しかし吾々がまた彼等と同じやうに問題の樂觀的な見透しを得るか否かは疑問であつて、これを決するものは一つに彼等には未だ多少欠けてゐる所の系統的な社會心理學的研究でなければならない。(註二七) しかも彼等から一歩を抽ることは資本家的立場の拘束から脫出することに於いてのみ可能となる。かくて經濟心理學者が問題それ自體の心理學的立場を忠實に追及して行くとすれば、彼等は軈て資本家的立場の拘束に矛盾を見出し、もはや能率增進問題ではなく勞働生產力の增進問題が應用心理學の問題として重要であることを知り得るに至るであらう。そしてこれこそ應用心理學者の科學者としての眞實の態度でなければならない。(註二八)

註一六　Münsterberg; Psychologie u. Wirtschaftsleben, S. 81.

註一七　Derselbe; Grundzüge der Psychotechnik, S. 198.

註一八　W. Moede; Experimentelle Massenpsychologie, 1920.

Derselbe; Lehrbuch, S. 21 ff.

註一九　Vgl. P. Plaut; Massenpsychologie, in: Hdb. d. Arbeitswiss., Bd. V, Teil I, 1928, S. 143-170.

註二〇　Giese; Methoden der Wirtschaftspsychologie, S. 3.

註二一　F. Giese; Der Durchschnittsmensch als Objekt der sammelforschung, (Zeitschr. f. ang. Psychol. Bd. 36, Heft 1-2, 1930.)

註二二　Derselbe; Methoden, S. 262.

註二三　F. Baumgarten; Psychologie der Menschenbehandlung im Betriebe, in: Hdb. d. Arbeitswiss., Bd. V, Teil 3, 1930, S. 544.

註二四　Giese; Methoden, S. 226 u. 262.

註二五　Vgl. Hdb. d. Arbeitswiss., Bd. V, S. 182 ff.

註二六　Ebenda, S. 132-133.

註二七　私は既に別の機會に於いて、資本家的實踐に於いて勞働者の態度を能率增進のために好都合のものとしやうとすることは、資本主義の下に於ける勞働者の生活環境の社會心理學的研究から觀て、最後の限界を有するものであることを不充分ながら示さうとした。（拙稿、勞働者の勞働に對する主觀的態度の問題に就いて、經營經濟研究　第十六册）

尙ほこの機會に、序でながら、右の拙文中ブラウトの社會心理學的研究に關說してゐる部分は、（同誌、二二頁）遺憾乍ら不注意な序述であつて、それは訂正せられねばならないのであるが、彼の研究の評價に就いては本章の註二六の部分に關して述べた通りである。

註二八　吾國の應用心理學者中にあつては、倉敷の勞働科學研究所の桐原葆見博士は全く異色ある存在であると見られ得る。氏の經濟心理學―氏の謂ふ精神工學―に對する批判的な態度は、他の能率心理學者に比較すれば、勞働者の個性の伸展のための、勞働者人格の眞に心理學的な問題を指摘せられてゐる。そして氏は「生活の合理化」としての眞の產業合理化に役立つべき經濟心理學が、自然科學的心理學並に精神科學的心理學の方法の外に、最後には社會心理學方法に基づき、社會政策に參與し得ることを述べて居られるが、これはまた氏の批判的態度の當然の歸結であつて、吾々はこの社會心理學的方法に基づく氏の經濟心理學的業蹟の速かに世に出でんことを期待して止まない。（同氏、產業合理化の精神技術　勞働科學研究　第七卷　第一號參照）

附記　本論は經濟心理學に關する問題を全般的に取扱はふとする私の論稿の單に一部分に過ぎないものである。從つて本論だけでは未だ問題は多く殘されてゐる。即ち例へば應用心理學は普通には實踐的應用心理學と、理論的應用心理學とに解され、また經濟心理學と稱せられるものが應用心理學としてこの二途に解されてゐるが如き問題、更らに社會心理學と稱せられるもの〻種々なる見解とその批判といふが如き問題がこれである。尙ほ私は此處に人間技術學の問題の一部分を示したに示ぎないのであつて、その內容を明かにして更らに讀者の理解を得なければならないのであるが、これ等の問題は何れ出來るだけ最近の機會に公表し度いと思つてゐる。

（昭和九年八月稿）